

## 尚志イレブンの課題と可能性

高校サッカーの全国大会と言え  
ば、夏に行われる全国高等学校総合  
体育大会（高校総体）、そして、年  
末年始に行われる全国高校サッカー  
選手権大会（選手権）がよく知られ  
ている。さらに、高校やクラブチー  
ムの強豪がリーグ戦で年間王者を決  
める「高円宮杯U-18サッカーリー  
グ」があり、高校サッカーではこれ  
らをまとめて「三冠」と呼ぶ。

中でも注目度が高いのは選手権  
だ。地元代表の試合を中心にテレビ  
で生中継され、会場には多くの観客

が訪れる。将来の日本代表候補が出  
場していることもあって、継続して  
見ているファンも多い。

そんな選手権で、今年度福島県代  
表となったのは尚志だった。23年度  
に県勢初となるベスト4進出を果た  
したものの、翌年度以降は不振が続  
き、2年連続県大会敗退。満を持し  
て臨んだ今年は県大会決勝で富岡に  
5-0で圧勝し、3年ぶりに出場権  
を掴んだ。

迎えた選手権1回戦の対戦相手  
は、全国屈指の強豪校・広島皆実（広  
島）だった。

20年度には選手権優勝を  
果たしている強豪で、今年度  
の高校総体でも8強入りし  
た。厚みのある攻撃と県大会  
6試合無失点の安定した守  
備を兼ね備えており、優勝候  
補に挙げる声もあった。

だが、尚志イレブンは気後  
れすることなく冷静に立ち

向かっていく。

前半は堅い守りに阻まれシュート  
ゼロに抑えられていたが、後半に  
入って相手守備の足が止まり始め、  
その隙を狙うように後半29分、途中  
出場の長身FW佐藤蒼晃がロングス  
ローからヘディングで決めた。37分  
には相手守備陣のオウンゴールもあ  
り、2-0で勝利を決めた。

チームを率いる仲村浩二監督は試  
合をこう振り返る。

「広島皆実の前線4人の攻撃力は  
大会トップクラスだと思っていた  
ので、その4人にボールが渡った瞬  
間、2対1の状況を作り出して抑え  
込む作戦を徹底したんです。守備陣  
の選手たちが粘り強く守り、途中出

場の佐藤がヘディングシュートを決  
めた。当初想定していたプランを上  
回る展開で勝利できました」

広島皆実は仲村監督にとって、思  
い入れがあるチームだったという。  
「夏の高校総体で市立船橋（千葉）  
に3-2で逆転勝ちした試合を観戦  
し、強い印象が残っていたので、抽  
選で対戦相手が決まったとき、『よ  
りによってなんで強いところを引く  
んだ!』と愕然としました。ただ、  
ある種運命的なものも感じました。  
と言うのも、同校とは19年度の選手  
権でも対戦経験があつて、そのとき  
は完敗しているんです。それだけに  
今回は何としても勝たなければなら  
ないと思いました」

年末年始に行われた第93回全国高校サッカー選手権大  
会（以下選手権と表記）で、福島県代表の尚志高校（郡  
山市）がベスト16入りを果たした。3年ぶりの出場となっ  
た選手権をどんな思いで戦っていたのか。同校の仲村浩  
二監督に試合を振り返ってもらうとともに、選手権で感  
じた手応えや課題、今後の目標なども語ってもらった。



仲村浩二監督

# 目標は地元・郡山のサッカータウン化

19年度、尚志は県大会決勝で郡山を破り、2年連続で県代表となった。

当時の福島県勢はさまざまなチームが出場していたものの、初戦敗退も多かった。そうした中で、仲村監督は全国に通用するチームとして鍛え上げたつもりだったが、1回戦で当たった広島皆実に終始圧倒され、3-0で敗北した。

「まだまだ『県内では強い』レベルに過ぎなかった」と痛感した仲村監督は、そこから育成方法を見直し、さらなるレベルアップに着手してきた経緯があった。この間の成長ぶりを示すためにも、後のことは考えず、全力で戦うしかない——そう決意を固めて臨んだ一戦だっただけに、勝利の喜びは大きかった。

初戦突破で勢いに乗った選手たちは、2回戦の聖和学園（宮城）ですらに見事な試合運びを見せる。

聖和学園は技術練習を徹底し、隙あらば積極的にドリブルで仕掛けていくチームで、高校サッカーファンの間でも魅力的なチームとして知られていた。1回戦ではエースストライカーのFW坂本和雅が3得点1アシストと大爆発し、秀岳館（熊本）に4-1で快勝していた。

「選手権直前の練習試合で、今年度の選手権で優勝した星陵（石川）に4-1で勝利した試合を観戦しており、『相当仕上がりがいい』と感じていた」仲村監督は、またしても頭を抱えることになった。もつとも、1回戦と異なるのは、尚志と聖和学園はともに、高田宮杯U-18サッカーリーグの上位リーグ・プリンスリーグ東北に参戦しており、練習試合も含め年間10試合以上対戦していたことだった。

「ドリブル技術を全国トップクラスにまで鍛え上げているチームなので、相手に気持ち良く攻めさせないよう前後で挟みこんでボールを奪い、素早い展開でオーバーンスペースに散らして反撃する作戦を立てました」

作戦は見事に的中し、坂本をはじめ強力な攻撃陣を抑えこんだ。試合は尚志ペースで進み、前半23分にFW小野寛之が味方シュートのこぼれ球を冷静に決めると、前半36分にはMFからの縦パスに反応したFW渋谷和平が2点目を追加。後半5分にはロングスローから主将のDF山城廉が3点目を挙げて、勝利を決定付けた。

## 「勝負どころで勝てなかった」

2連勝で勢いづく尚志の前に立ちはだかかったのが、3回戦の対戦相手・立正大湊南（島根）だった。

尚志はパスをつないでチャンスをつくるものの、なかなか得点につなげることができない。そうした中で、前半32分立正大湊南DF平田健人の豪快なミドルシュートが尚志ゴールに突き刺さった。

仲村監督はこう振り返る。

「前半からボールをうまく動かして自分たちのサッカーはできていたんですが、相手のディフェンスラインを崩すことができませんでした。ボール支配率では尚志が圧倒的に上回っていたと思うのですが、決定的な場面は相手の方が多かったと思います。先制点のシュートで浮足立ってプランが崩れた面もありました」

後半からは選手権直前に負傷したエースストライカー・FW林純平を投入した。プリンスリーグ得点ランキング2位の22得点を挙げ、高校総体の優秀選手に選ばれたほどの選手なので期待されたが、けがの影響で本来の動きはできず、得点を挙げることはできなかった。逆に後半12分、相手MF高田雅貴に追加点を挙げられた。

こうして尚志の3年ぶりの選手権は幕を閉じた。

仲村監督に選手権の率直な感想を尋ねると、「確かにエースが怪我したことも大きかったのですが、とにかく今年度は勝負どころで負けることが多かったんです」と苦笑した。

夏の高校総体では、強豪校・青森山田（青森）と互角に戦い、PK戦までもつれ込んだが結局敗北。8強に残ることはできなかった。

プリンスリーグでは、開幕戦から首位をキープしてきたのに、最終節で敗北したために2位のJ1ベガルタ仙台のユースチームに抜かされ、上位リーグであるプレミアリーグへの昇格を逃した。

「広島皆実、聖和学園と全国的に

知られる強豪校を破り、一つの壁は乗り越えたのかもしれないが、『どうせならこの勢いでもうちょっと先に進みたい』という壁がなかなか越えられなかった。サッカーノートを作って選手と交換日記しているのですが、『この勝負弱さが今年のうちの弱点です』と自虐的に書いてくる子が何人かいたほどです」

今回の結果だけ見ると、選手権出場を2季連続で逃していたのが信じられない戦いぶりだったが、仲村監督によると「23年度に選手権ベスト4になって以降、自分たちでも気が付かないうちに、チームのバランスが崩れていた」という。

震災・原発事故直後に活動休止状態に追い込まれ、屋外練習が制限される中で選手権ベスト4まで勝ち上がった同校は大いに注目を集めた。県民からも「感動した」、「勇気をもたらした」という声が相次いだ。だが、それが知らず知らずのうちに「全国ベスト4になったチーム」というプレッシャーになっていった。

同校は堅い守りからボールを奪い、素早く前線につないでゴール

を狙う戦術を得意としており、練習ではとにかく走ることを重視していた。だが、選手たちはさらなるレベルアップを求め「走る練習ばかりでなく、もつと違う練習に時間を割きたい」と主張するようになり、仲村監督もそれを受け入れた。

選手起用や戦術をめぐる外野からの雑音も監督の耳にストレートに入ってくるようになった。活躍した翌年だからこそ、これまで以上に鍛え上げて地盤をつくる必要があったのに、さまざまな面で微妙なズレ

が生じ始めた。そうしたズレが2年連続選手権県大会敗退という結果につながった。

「準決勝に進出し、聖地・国立競技場でプレーできたのはうれしいことでしたが、『また行かなければならない』というプレッシャーはつくづく大きいものだと感じました。18年度の選手権で優勝した盛岡商業（岩手）をはじめ、選手権で活躍したチームが翌年出場すらできない事

## 屋内サッカー世界大会に出場

仲村監督は千葉県出身で、習志野で選手権に2度出場した。順天堂大学在籍中にはバルセロナ五輪代表候補に選ばれるほどの実力で、大学卒業後はJFLの福島FCに入団。その後、FCプリメーロなどを経て、尚志の監督になった。

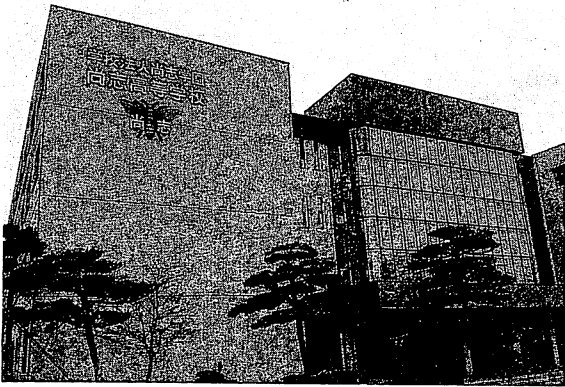
チーム強化のため、かつてのチームメイトに協力を依頼し、千葉県内では目立たないが能力が高い選手に声をかけ続けたところ、活躍の場を求め越境入学してくるようになった。全国大会で勝ち星を上げるうちに福島県内からも優秀な選手が入り

例を見てきましたが、あらためてその大変さを思い知らされました」

この状況から抜け出そうともがいてきたのが、今年度の3年生だった。4強になった直後に入学し、これまで一度も選手権に出場していなかったため、「崖っぷち」というテーマを掲げ、自発的に練習に取り組んできた。強豪校と云えども、監督や選手がもがき苦しみながら掴み取った選手権出場だったわけ。

始め、今や県内有数のサッカー強豪校として知られるようになった。こうした中で、仲村監督は、さらなる強化を図るため、県内にサッカー文化を根付かせるための取り組みを進めている。

その1つが尚志が母体となつて立ち上げた「ラッセル郡山ジュニアユース」だ。尚志OBがコーチ陣に入っており、県中地区の中学生がサッカーの技術を学ぶ場として定着しつつある。中学生年代のチームで行われる高円宮杯U-15みちのくリーグ南では残留圏内の7位に入り、実力の高

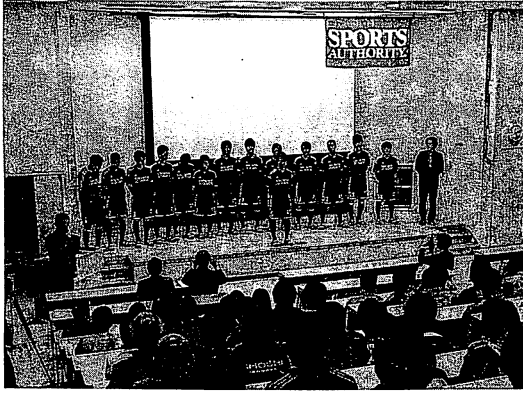


尚志高校

さを証明した。尚志の主力メンバーの中にも、ラッセル郡山1期生が3人入っていた。

また、それ以外の県内出身者もMF稲村知大など3人がスタメンで活躍した。こうして地元の子どもたちを育成して全国大会である程度結果を残せる仕組みができれば、サッカーレベルの底上げ、さらにはサッカー文化の定着につながっていくのかもしれない。

「最近では『選手層が厚い尚志では試合に出れない』と、ラッセル郡山からライバル校に進学するケース



ケラミックカップの壮行会

も少なくありません。指導者としては少し複雑ですが、地域のサッカーレベル底上げには確実につながっていると思います。後はサッカーをやめるのに最適な人工芝のグラウンドがもっと増えてほしいですね」

1月にはドイツで盛んな屋内サッカー「ハーレーンフースバル」の国際的な大会「ケラミックカップ」に、尚志サッカー部が日本代表として出場。予選リーグ敗退に終わったものの、ブンデスリーガの一流クラブのユースチームと戦うという貴重な経験を積んだ。

昨年行われた日本大会に1年生主体のチームで参戦し、Jリーグクラブ

## 期待されるプロチームの活躍

仲村監督は「尚志が中心となってサッカーに関わる人を増やし、サッカー文化を高めていくことで、郡山市をサッカータウンにしていければいいですね」と語る。

「高校では体育教員を務めていることもあって、震災・原発事故後、県内の子どもたちの体力が低下している現状を懸念しています。まずは

ブ傘下のユースチームを次々と破って優勝した。そのメンバーの中にもラッセル郡山の卒業生が何人か含まれているというから、育成システムが結果を残しつつあることが分かる。

来年度中には、同系列の尚志緑ヶ丘幼稚園や尚志幼稚園の園児を対象にサッカースクールが新たに立ち上げられ、今後は「尚志の幼稚園でサッカーに触れた子どもが、将来尚志高校に入り、全国大会で活躍する」システムを目指していくという。

また、サッカー部OBが同校の近くで接骨院を開院したり、トレーナーとなって選手に指導したりと、協力を得られるようになっていく。

「尚志が中心となってサッカーに関わる人を増やし、サッカー文化を高めていくことで、郡山市をサッカータウンにしていければいいですね」と語る。

「高校では体育教員を務めていることもあって、震災・原発事故後、県内の子どもたちの体力が低下している現状を懸念しています。まずは

持つてもらう必要性も感じている。

「隣県ではプロサッカーチームをファンや企業が熱心に応援しているのに、県内では過去のチームはもちろん、J3に参戦している福島ユナイテッドでもファン拡大に苦戦しているように見えます。私がプレーしていた福島FCもそうでしたが、すべての県民が応援できるチームを作るのは案外難しいので、応援しなくなるチーム作りを特に心がける必要があると思います。そういう意味では、福島ユナイテッドに、J1での出場実績があり福島市出身の茂木弘人選手が加入した効果は大きいのではないのでしょうか。いずれにしても、子どもたちが憧れる存在が身近にいくことで、育成年代のアマチュアスポーツも自ずと盛り上がっていくと思うので、指導者としても期待しています」

平成10年の創部と同時に監督として招聘され、時間をかけて強豪校にしていって仲村監督。「県内にサッカー文化を定着させ、サッカータウンをつくる」という夢もきつと達成できるはずだ。